



MY
ACTION

Vol. 15

私らしいボランティアの方法を探して

タレント 向井 亜紀

MUKAI AKI



© 高田道場

PROFILE

1964年埼玉県出身。大学在学中にラジオのパーソナリティーとしてデビュー。その後、テレビ、ラジオ、講演、執筆活動など幅広く活躍。高田道場（代表高田延彦）主催の子ども向けチャリティイベント「ダイヤモンドキッズカレッジ」ではMCとして、これまでに全国で延べ3,500人の子どもたちと触れ合ってきた。

2002年のことです。友人の紹介で行った病院の待合室で、偶然「ダルニー奨学金※」のパンフレットを見つけました。手づくり感あふれる温かい誌面。支援に携わる人たちの愛情がひしひしと伝わってきて、これこそ“顔の見える支援”だと、とても感銘を受けたのを覚えています。それまでも他の国際協力関連団体に毎月寄付をしていましたが、何か足りない、もっとできることがあるのではと、ずっと感じていて。「私が探していたのはこれだ」と思い、すぐに電話で問い合わせました。

正直言うと、ボランティアをしたいという気持ちは以前から強かったものの、上から目線の自己満足じゃないかとか、単なる売名アピールだと思われるんじゃないかとか、心の中で葛藤もあったんです。そんな私の背中を押してくれたのが、アメリカの代理母との出会いでした。

彼女は私に「何か人のためにできることをずっと探していた。実現させてくれてありがとう」と言ってくれたんです。心にも身体にも負担がかかる中で、まさかそんな言葉を掛けてもらえるとは想像もしていませんでした。その彼女の真っすぐさに刺激されて、周りの目なんて関係ない、今私ができることをしようと、自然に思えるようになったんです。

支援することになったタイの女の子の写真を見たとき、びっくりしました。小学生のころの私そっくりで（笑）。一気に親戚気分になりましたね。事務局を通して彼女から送られてくる手紙を読みながら、病気していないかなとか、頑張ってる勉強しているかなとか、いろいろな思いを巡らせてきました。

実は、私はずっと「あしながおじさん」でいいと考えていたのですが、ダルニー奨学金の招きで、現在支援し

ている学生たちが来日することになり、ついに対面が実現したんです。緊張して冷たくなっていた指、私をずっと見つめてくれていた瞳が忘れられません。会ってよかったです。

彼女との会話で一番印象に残っているのは、「宝物は何ですか?」と尋ねたとき、「お母さん」という答えが返ってきたことです。この年齢で迷わずそう言える彼女の心の豊かさを感じ入りました。「私も自分の子どもにそう言ってもらえるように頑張るから。一緒に頑張っていこうね」と約束して別れました。

私にとって、ボランティアは日々の生活の楽しみの一つになっています。少しの応援で、世界の子どもたちの未来が変わるかもしれない。それは、私たち自身の幸せにもつながることだと確信しています。

※一般財団法人国際センターによるタイ・ラオス・カンボジアの子どもの就学を支援するプログラム。